京太郎放浪記

偶数

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【青春編】

戦後間もない東京に迷い込んだ京太郎が麻雀放浪記のキャラクター達と戦い、魔物を食らえる程度の実力をつける物語。

【注意】

青春編が終了しないかぎり『咲―ｓａｋｉ―』キャラクターは登場しません。

目次

青春編

チンチロ部落 1―1 1
チンチロ部落 1―2 4
チンチロ部落 1―3 8
チンチロ部落 1―4 11
最初の天和 1―1 14
最初の天和 1―2 17
最初の天和 1―3 20
不吉な金曜日 1―1 23
不吉な金曜日 1―2 27
不吉な金曜日 1―3 30
不吉な金曜日 1―4 33
ガン牌野郎 1―1 38
夜明けの譜 1―1 43
夜明けの譜 1―2 47
二の二の一座 1―1 51
二の二の一座 1―2 58

青春編

チンチロ部落　1―1

もはやお忘れであろう。或いは、ごくありきたりの常識としてご存知ない方も多かろう。が、試しに東京の舗装道路を、どこといわず掘ってみれば、確実に、ドス黒い焼土がすぐさま現れてくる筈である。

◇◆◇◆◇

恐ろしくドス黒い雲が空を覆っている。これはものの数時間で大雨がくるのは空を見上げた誰しもがわかる程である。もしくは、このジメジメとして嫌な雰囲気で雨が降り注ぐことを理解する人間もいるのかもしれない。

金色の地毛をなびかせ、酷く小奇麗な学生服を着た少年は酷くどんよりとした表情で公園で羽を休めている放浪者と同じように酷くどんよりとした暗い表情をしていた。

少年はゆっくりと腰掛けていた花壇から離れ、今日一日を乗り過ごすために財布の中にジャラジャラと入ったこの時代では使えない硬貨をくず鉄屋に持って行こうとした。

「おい兄さん、ちょっと話があるんだ。こっちへ来いよ」

とみすぼらしい格好をした中年の男性が少年を呼び止める。

少年は男の姿を見てすぐに戦争で怪我をした人間だと理解する。何故なら、その男の左腕が肩のところからすっぽりなかったからだ。

「何だい？　用があるならそこで聞かせてくれよ」

「煙草があるんだ、どうだ、一本吸わないか」

少年の一瞬の油断に漬け込んで男は腹部に刃物を突きつける。

「金を出せ……」

「今からその金を作りに行くところなんだよ、邪魔しないでくれって……」

「……　京？　おまえ京じゃないか!?　俺だよ、上州寅だ！」

男は刃物をしまい、少年の肩を残っている右手でポンポンと叩く。

少年は意味がわからないと首を傾げるのだが、男の方はどうやら少

年に見覚えがあるらしい。
「おまえ、戦争に行って死んだって聞いたんだが、まさか生きてたとは……」
　少年は一瞬困惑するが、誰かと見間違えてくれているのならそちらの方がいい、下手に他人だと言ってしまえばもう一度刃物で脅されて身ぐるみを剥がされるのが目に見えているからだ。
「寅さんかい？」
「ああ、工場で一緒に働いていた上州寅だよ！　ああ、懐かしいな……　おまえはボイラー室の博打じゃ負け知らずだったからな～」
「いや、一番勝ってたのは寅さんじゃないか」
　寅はしゅんと下を向き、俺はもうダメだと弱音に近い声色で告げた。
「俺ぁ、三十年もこの道で年季を入れているが、どうもいけねぇ、ここ数年はここぞという時の大勝負に悪い目が出る。まるで勝負の神様に嫌われているようだ」
「……　寅さん」
　寅は愚痴をこぼすように部落で行われているチンチロ賭博のことを喋った。
　少年は決意を決めて立ち上がった。
「寅さん――俺をそこへ連れて行ってくれないか」
　寅は鋭く刃物のような瞳で「坊や。おまえがやる気か？」と尋ねた。
「うん、そのまえに一度質屋で小銭を手に入れないといけないから」
「その服を売るのか？」
「いや、海外の小銭を持っててさ。それがそれなりの値段で売れるんだ」
　少年は寅を連れてこの近くに存在する質屋に向かった。
◇◆◇◆◇
「いらっしゃい、また来たのかい？」
　少年を見た質屋の旦那は苦笑いを見せながら今日な何枚うってくれるんだと尋ねてくる。すると財布の小銭入れを全部台に置き、いく

らになるかと少年は尋ねる。
一円、十円、五十円、百円。
この時代に存在するはずのない硬貨だ。
「……三百円でどうだい？」
「じゃあ、それで」
「何だこりゃ？　見たことない小銭だな……」
「ああ、戦争中に手に入れたお金であんまり枚数がないから高く勝ってもらえるんだ」
質屋の旦那が持ってきた三十枚の十円札のうちの十枚を寅に渡し、チンチロ部落へ足を運ぶ。

チンチロ部落　1―2

ドス黒い雲から大粒の雨が降り注ぎはじめた。
だが、みすぼらしい小屋にいる全員がこの大雨のことなんて気にすることなくただただ、三つのサイコロの目を争い、さかっていた。
少年は場に到着した瞬間に生唾を飲み込んだ。一回の勝負に高くて百円、安くて二十円という大金が動いていた。それも一回の勝負が非常に一瞬のため、勝負に慣れていない少年には少しばかり刺激が強いようだ。
寅は少年から渡された十円札十枚を握りしめて、もう一度このチンチロ賭博の輪の中に入った。少年もそれにつられてゆっくりと輪の中に着する。隣は上州寅とこの場所で二番目に年の若いドサ健と呼ばれた男だ。
「チンチロリンか……」
「わかるのか？」
「流石にやり方くらいはわかるよ」
少年は気負いながらも場の流れをゆっくりと確かめる。
チンチロ、正式名称チンチロリンとはサイコロを使用した賭博の代表格の一つである。それに付け加えてサイコロ三つと丼か茶碗さえ有ればすることの出来る。それにサイコロを茶碗に投げるという動作はイカサマをしにくく、サイコロはチンチロリンと甲高い音を立て跳ねるのでサイコロに工夫をしないかぎりイカサマは不可能と断言してもいい。
出目は至って簡単、二つ重なった二つの目とそうでない一つの目、そうでない目の方が数字になる。つまり、『2・2・1』ならば出目は一、『2・2・6』ならば出目は六となる。それ以外にも四五六『4・5・6』と呼ばれる倍付けの目がったり、一二三『1・2・3』と呼ばれる倍返しの目があったりする。ゾロ目は二～六までのゾロ目は三倍付け、一のゾロ目は五倍付けになる。
「坊やは賭けないのか？」
「……　場についてすぐに賭けるのは愚かだろ？　少しだけ流れを

見たいんだ」
少年は揺れる心を押さえつけてゆっくりと場の流れを見極めようとする。
一回の勝負の流れが早いと同時に運の流れが見分けやすいチンチロは誰が上がり調子なのか、落ち目なのかを理解しやすい。出来れば全員が親をして、一周した時に金を掛けたほうがいい。麻雀とは違う運の探りあいなのだ。
男達はゆっくりと流れを探っている少年のことなど考えもしないで自分達の種銭を少しでも稼ごうと大きく掛けたり、自分の第六感を信じて掛け金を下げたりしている。それはまるで愚直に前進し、時に敵兵を殺し、時に殺される兵士に似ていた。逃げる姿、後退する姿などない。
ようやく全員が親をして、もう一周目に入った。少年は流れをある程度把握し、親で大勝した小太りの中年に親が回ってくるのを待った。寅の方は着々と種銭を減らし、自分に運が無いことをシミジミと痛感している。
「百円張らせてもらいます」
小太りの男が親を引く受けたと同時に十枚の十円札を畳の上に置いた。
「京！　流石に張り過ぎじゃないか？」寅は冷や汗を流しながら少年の掛け金を心配する。
「寅さんも張ったほうがいい、そんな気がするんだ」そんな言葉は知らないと少年は告げる。
「なら、俺も張らせてもらおうかな」隣のドサ健という男が五枚の十円札を畳に置いた。
寅は狂っていると十円だけ畳に置き、少年の考えを見抜こうとした。
チンチロリンと甲高い音が小屋の中を響き渡り、親が出した目は『1・2・3』全員に倍返しである。
悔しそうに掛けた人間達に金を払う男は何故、こんな目が出たんだと心底悔しそうに表情を歪めた。だが、少年にしてみれば、これは必

然的な勝利、勝つべくして勝ったのだ。
「驚いた、ここまで運の流れを理解できる奴がいるなんて……」
ドサ健はニヤリと笑い、倍の数字の百円を懐に収めた。
寅の方もこれは少年の理論に乗るしかないと少年が降りたら降りる、少年が張ったら張ることを心がけた。
◆◇◆◇◆
少年は凱旋をするように札束を数えながらゆっくりとまだまだ復興の進んでいない街を歩いた。その後ろには上州寅とドサ健も続いている。
「雑に数えて千二百円は勝ってるぜ……」
「今日はよく勝たせてもらったぜ」
二人は大勝と札束の香りに心を踊らせ、この金をどう使うかと頭を悩ませている。
「じゃあ、俺はこの辺りで失礼しますね」
「家に帰るのか?」
少年が失礼すると言った途端に寅は心配そうに顔を覗き込む。何故なら、寅が知る京という人間は空襲で家族を全員なくし、家も燃えている。なら、帰る場所などとうにないはずだ。
少年はバツが悪そうに真実を上州寅に告げる。
「寅さん。ごめん……俺騙してたんだ。俺は寅さんが言う京という人じゃなくて、須賀京太郎。それが本当の名前なんだ」
「え?」
「稼ぎ場所を知りたくて騙したんだ。ごめん」
寅はポカンと放心状態になるが、この金を作ってくれたのは京太郎という少年であり、自分の知る京という人間とそう変わりがないと思った。それに何より、京太郎は自分なんかより運の張り合いをよく理解している。今、この少年との縁を切るのは愚策だと思った。
「……おまえが京太郎だとしても、俺の中では京だ。また合ったら博打を一緒に打とうぜ」
「その時は俺もよろしくな」
上州寅とドサ健は京太郎の肩を叩いてその場を後にした。

京太郎は手に入れた金を握りしめて、ゆっくりと安宿に向かった。
これが最初の大勝である。

チンチロ部落　1―3

京太郎は久しい安眠を楽しんでいた。だが、深く眠れていると聞かれるとそうでもない。自分自身という存在が何故、戦後まもない東京に来てしまったのかを考えると眠れるものも眠れない。深く考えれば考える程、睡眠という行為を邪魔してしまうのだ。

京太郎は学ランのポケットの中に入ったシワだらけの十円札を取り出し、これで何日持つかを考えてみる。

「安宿での生活はたいした金はかからない……　でも、これが永遠に続くわけじゃない」

京太郎は何故、こんな事になったのかを振り返ってみる。

あれはインターハイから帰ってきた次の日の事だった。団体戦の全国制覇を果たした清澄高校の麻雀部は部長、竹井久との打ち納めのために部室で朝から夜まで麻雀を打った。だが、京太郎は一度しか勝利することが出来なかった。運の要素が強い麻雀で、数十回もの対局を重ねてもなお、一度しか勝利することが出来なかった。

圧倒的実力と言えば、彼女達も胸を張れるかもしれないが、京太郎はそうとは思わなかったのである。

「勝ったのは殆ど運だった……　国士無双がダブルリーチ状態で入ってくれれば誰だって上がれるに決まってる。いや、あの面子じゃあ、二割程度だったのかな……」

国士無双、それがダブルリーチで入ってきた。普通ならば出やすい老頭牌でも、あの面子、宮永咲、原村和、竹井久の面子で打てば二割程度の和了率だと考えても可笑しくはない数字である。それくらい、彼女達にはオカルトという超常現象に愛されているということだ。

「国士無双――あんなに出て嬉しくなかった役満ははじめてだった……」

京太郎は溜息を吐き出し、不貞寝をするように誇り臭い枕に顔を埋めた。

あの日、役満はそう珍しいものではなかった。天和や九蓮宝燈などこそ出なかったが、役満御三家と緑一色、はたまた四槓子などという

役満のオンパレードだった。そう考えると『国士無双』という価値のある役満はそこら辺に落ちている石ころと大して変わりはなかったのだ。

「……俺は間違った打ち方をしたのか？」

オカルト打ち、デジタル打ち。京太郎はこの二つの中のデジタル打ち、それも守り重視のデジタル打ちを学び、放銃率を下げて最低でも二位に入れる打ち方を勉強した。絶対に放銃せず、手に似合った役を作り、一発を消して相手の手を安くする。理想的なデジタル打ち、だが、それすら砕くのがオカルト打ち。どんなに放銃率を下げようともツモられたら意味が無い。ツモられ貧乏、最終的に千点の差で四位に甘んじる。

悔しいと思おうとも、守り重視の打ち方で勝利をもぎ取ることは出来ない。なら、攻め重視なら？　逆にそれは放銃率を上げて飛ばされるのが関の山、愚策でしかない。結局はオカルトにデジタルは歯がたたない。

「バカバカしい……　あれは麻雀じゃない、ただの札合わせだ」

負け犬の遠吠えを吐き捨てて浅い眠りについた。

◆◇◆◇◆

ある程度体を休めたと同時に安宿を出て安くて腹を満たせる飯屋を探した。だが、物資が不足しているこの時代に質と量を問える店は少なく、米軍からの横流し品のレーションと呼ばれる軍用食量の方が安くて腹を満たせる。それでも、昨晩の大勝で勝った金を少しでも使って豪遊をしたかったため、うどんと書かれた看板の店に腰を下ろした。

「うどんをちょうだい」

京太郎は暗い表情でうどん屋でうどんを注文する。

「負けたのかい？」

うどん屋の店主は暗い京太郎の表情を見て博打で負けたのだろうかとカマをかけてみるが、京太郎は学ランのポケットから札束と呼べる十円札を取り出し、ここのうどん屋はこれだけ持っててても足りないのかと逆にカマをかける。

「博打で勝って暗そうな表情をする奴は珍しいよ」
「あぶく銭より、汗水たらして働いた金の方が気持ち良く使えるのさ」
「違いない！」
割り箸を裂いて作られたうどんを口の中に入れた。物資が不足しているのであろう、薄味だが、久しいうどんの味に涙を流しそうになる。それでも、箸と口は止めないで一口一口を味わって噛みしめる。
すると隣に老人が現れて例のものと店主に言葉をかけた。
「若いの、勝ってるか」老人は隣りに座っている京太郎に質問をする。
「人並みに」京太郎はひとまず謙遜するように人並みにと答えた。
店主は奥の方からダンボールに入った大量のさつまいもを持ってきた。
京太郎はそのさつまいもが少しだけ気になった。
「ワシはこの近くの教会で神父をやっとる者じゃ」
「へぇ、そうなんですか……」
「恵んではくれないか。戦争で親を亡くした子供を育ててるんじゃが、育ち盛りの子供達に芋だけを食わすのは少し忍びないんじゃ。一円でいいから恵んでくれないか……」
京太郎は少し考え、神父の目をしっかりと見つめた――嘘がない。
「なあ、そのさつまいもはいくらなんだい？」
「んあ、ああ、市場で安く買い叩いたから五十円ほど貰えれば……」
「六十円、うどん代を含めて足りるかい？」
ポケットの中から十円札を六枚取り出してその場に置いた。
嘘をついていない人間に恵まない人間なんてただの屑だ。懐が温かいならば恵むのが当たり前だ。
神父は一言、温かい一言、ありがとうと告げて芋を持って店から立ち去った。
「あの人は本当に人間が出来てるよ――あれが聖職者ってやつなんだろうな」
「戦争で両親を亡くした子供は多いってことですね……」
「でも、それを庇ってくれる大人は雀の涙だ」
うどんの汁を飲み干してもう一度、昨日の部落に足を運んだ。

チンチロ部落　1―4

チンチロ部落についたと同時に京太郎はチンチロリンと甲高い音色を奏でるむさ苦しい男達の輪に入り、昨晩と同じように流れを見極めようとする。そして、同じように全員が親を経験したと同時に自分も賭けを開始する。だが、昨晩のように大きな額を賭けるわけではなく、十円や二十円と小幅な金額でビギナーズラッグだったのか、それとも自分の理論が正しかったのかを確かめる。

「あら、新しい顔の人がいるじゃない？　それも中々の顔ねぇ～」

お凛と呼ばれるオカマが京太郎を舐めるように見つめる。

嫌な予感がした。このオカマ、何か仕掛けをしている。京太郎の第六感がそう叫び、お凛が親の時に賭けることを躊躇させた。

「じゃあ、私の親ね！　さあ、賭けて賭けて!!」

京太郎は十円札を畳の上に置こうとしたが、ざわりと嫌な汗が流れ、それを躊躇った。

「ごめん、降りさせてもらうよ」

「何よ！　賭けたんなら降りちゃダメでしょ!?」

「いいじゃないか、まだ振ってないんだから」

周りの客に助けられて賭けるのを取りやめることが出来た。

「(何なんだ、この違和感は……)」

京太郎はお凛が親を引き受けたら降りることを繰り返し、ようやくこの違和感の正体に気がつくことが出来た。こいつ、サイコロに仕込みを入れていると……

本来ならば問い詰めるのが筋なのであろうが、京太郎はそれをしなかった。この場所には、この場所の賭け方がある。それに、もしこの仕込みを入れたサイコロについて脅せば、ここ以外の賭博場を紹介してもらえる可能性も少なからず存在すると思い。指摘することはなかった。

「おお、京太郎、来てたのか」

ドサ健が部落に入ってきて京太郎の隣に腰を下ろした。そして、来たばかりの京太郎と同じように全員が親を務めるまでゆっくりとそ

の場に座るだけという行為を繰り返す。
「今日はあんまり賭けてないようだな」
「うん、今日は昨日の勝負がビギナーズラッグじゃないかを確かめてるんだ」
「ビギナーズラッグ？　何だそりゃ・・・・・」
　京太郎は初心者が運がよく勝つことだよとドサ健に説明する。するとそうか、俺も初心者によく負けてすっからかんになるんだよと高笑いしながら背中をドンドンと叩いた。だが、京太郎と同じくこの場にいる人間の運の流れを鋭く観察していた。
　全員が京太郎とドサ健以外が親を経験したと同時に京太郎は細い金額から、太い金額へシフトチェンジした。だが、絶対にお凛の時に賭けることはなく、絶対に勝てる相手から確実に金を毟り取る。昨晩と何らかわりのない賭け方だ。
「流石は京太郎だ、冷徹なまでに運の流れを理解してやがるぜ・・・・・」
　ドサ健は冷静に場の流を読み、自分の運で他人の運を食らう勝負師として最も必要なものに惚れ惚れしていた。もちろん、その勝負師として必要なものはドサ健も持ち合わせている。だが、切れ味が違う。絶対に勝つとわかっていても生半可な気持ちで賭けられるわけじゃない。時にも勝てる勝負も放して逃げ出してしまうこともある。だが、京太郎は絶対に放さない。食べられる獲物は絶対に食らう。底知れない勝負師の器だ。
「どうだ、親をやったらどうだい？」
　京太郎の真正面に座る君の悪い男が親にならないかと提案してくる。
「いや、今はまだ早いような気がするんだ。もう少し流れを読ませてください」
　京太郎が親を引き受けるのは本当に自分に運があると思った時だけだ。本来、親というのはそれ相応の覚悟がなければ引き受けてはならない。もし、生半可な気持ちで親を引き受けたら自分より運の強い奴に飲み込まれて有り金が全て飛んでいってしまう。
「お金を持ってるのに親を引き受けないのは卑怯よ!?」

「貧乏なんですよ……」
イカサマをしているくせにと少しだけ頭にきたが、それでも、一日でも多く食事にありつけるようにするためには機械的に勝負し、機械では図ることの出来ない運の流れを理解しなければならない。理系脳と文系脳の融合が賭け事で勝つ方法の一つだ。
「じゃあ、親を引き受けますね」
自分の隣二人が親を引き受けて大敗したと同時に京太郎は親を引き受けた。嗅ぎつけた、親で勝利するタイミングを。ドサ健はこれは今日は京太郎の一人勝ちだと苦笑いを見せて十円札を一枚だけ置いて、その場を去った。
チンチロリン、出た目は『四五六』倍付けである。
◆◇◆◇◆
京太郎は二夜連続して勝利した金を使って、闇市におもむき購入したコーラやチョコレート、ビスケットを持って今日出会った神父がいるであろう教会へ足を運んだ。すると教会の前で楽しげに遊んでいる子供達がいる。
「なあ、君達」
「ん？　なに」
「おっきな箱だね」
子供達は無邪気に京太郎の前へ近付き、何しに来たのと質問してくる。
「神父さんに伝えてくれないか？　貴方の優しさに馬鹿な博打打ちが心打たれたって……」
「うん、わかった！」
子供達に箱を渡して、京太郎は次の賭けが出来る程度の金を持って安宿に向かった。

最初の天和　1―1

チンチロ部落の常連客に聞いて辿り着いたスナックと書かれた如何わしい店に足を踏み入れる。すると顎が異様に青いいわえるオカマさん達が楽しげにお客さん達と会話とお酒を楽しんでいた。京太郎は顔を引きつらせながら、お凛を探した。

「あら、京太郎ちゃんじゃない！」

カウンターで中年の男性に焼酎をお酌していたお凛が嬉しそうに京太郎の名前を呼んだ。

「今日はチンチロをしに行かなかったの？」

「いや、チンチロだけじゃあ食べていけないから。割の良い稼ぎ場を知りたくてさ」

お凛は露骨に嫌な顔をして京太郎にこう告げる。

「博打打ちが自分の稼ぎ場を安々と教えると思ってるの？　博打打ちはね、自分にだけ甘い汁が舐められるようにする人種。稼ぎ場が知りたいなら他の人を当たってちょうだい！」

京太郎はこうなると最初からわかっていた。でも、この強情な態度を打ち崩す秘策は既に存在している。京太郎はポケットの中から三つのサイコロを取り出し、カウンターに置いてみせる。

「サイコロ、チンチロ用に用意したの？」

「お凛さんのサイコロはすぐにハッタリだってバレるからプレゼントとして用意してきたんだよ」

お凛は三つのサイコロを手に取り普通のサイコロとどの辺りが違うのかを確認する。すぐに理解した、このサイコロは信じられない工夫がされている。それも、自分が使っているサイコロの比じゃないくらいの完成度だ。

通常のサイコロには六つの数字が表示されている。だが、京太郎が用意してきたサイコロには四、五、六の数字しか存在せず、ゾロ目しか出すことの出来ないお凛のグラサイより数倍も優れたグラサイだ。

「お凛さん。素人にバレるようなサイコロは使わない方がいい。このサイコロならバレにくいから」

「――流石は京太郎ちゃんね。薄々気付かれてるとは思ってたけど……」
お凛はサイコロを受け取り、何か飲むかと京太郎に優しい声をかける。京太郎はニヤリと笑ってコーラとかありませんかと丁寧口調で尋ねた。すると瓶に入ったコーラを持ってきてくれた。
「いくらですか」
「いいわ、ハンサムな男の子にプレゼントを貰ったんだからお姉さんが奮発しちゃうわ！」
お凛さんはキャップを抜いてブクブクと小気味いい音を立てるコーラを京太郎に渡す。
京太郎は躊躇することなく、ゴクゴクと喉を鳴らしてコーラを飲み干した。すると目の前に住所らしき文字が書かれたメモが置かれていた。
「米軍の溜まり場になってるバーのＶＩＰ席で色々な賭博がやられているのよ。でも、入場料に二百円かかるから種銭は出来る限り増やして行った方が良いわね。あと、服装がみすぼらしいと入れてもらえないかもしれないから、私の知り合いの貸衣装屋に話しておくわ」
「何から何までありがとうございます」
「良いのよ。私、若い男の子が大好きだからね！」
苦笑いに近い愛想笑いを見せて、スナックから出た。
◆◇◆◇◆
チンチロ部落で入場料と貸衣装代を稼いだ後にお凛から渡されたメモを頼りに米軍が入り浸っているというバーに足を運んでみた。すると軍服を着た米軍の兵士達が次から次へと店の中に入っていき、店の外からでも英語が聞こえる程である。
「まるで洋画みたいだな」
「おまえ、洋画見たことあるのか？　俺は見たことないな」
何故か付いて来ているドサ健を冷たい視線で見つめるが、一応はＶＩＰ席に入れるように貸衣装屋でスーツを借りて入場料の二百円も持ってきているらしい。つくづく話さなければよかったと京太郎は後悔した。

二人は臆すること無くバーの中に足を運び、ＶＩＰ席があるであろう扉の前に経つガタイの良い日本人に二百円をチラつかせた。
「お凛さんからの紹介で来た。入場料はこれで足りるか？」
「はい、大丈夫ですよ」
二人はＶＩＰ席に移動して、まず最初に思ったのは自分達と生きている世界が違うということだ。
ルーレット、
ポーカー、
ブラックジャック、
小さいが映画で見られるような本物の台が置かれており、賭け事の本場の意地を感じさせられる。
「ルーレットは幅広く賭けないと儲けが出にくい。ポーカーやブラックジャックは引きが重要だ……」
京太郎は利益が出るであろう賭けを探し、ひとしきりＶＩＰ席を歩いた。そして、もう一つ部屋があることに気がつく。不思議に思って近くに居たママにこの部屋はどんな賭け事をしているのかと質問してみるとただ小さく、麻雀だよ。アルシーアル麻雀と。
「おお、麻雀があるのか。京太郎、麻雀にしようぜ」
「ごめん、アルシーアル麻雀の符の計算出来ないんだよ」
「なら、私が付いてあげるわ」
ママは京太郎に興味を持ったのか、符の計算が出来ないのであれば自分がしてあげると提案してくれた。京太郎は少しだけ悩んだが、アルシーアル麻雀、それもこの時代の米軍が行っていたアルシーアル麻雀は現在の日本式麻雀に近いし、役は殆ど日本式と同じだ。京太郎は首を縦に振り、部屋の中に入った。
アメリカ人だらけの卓に座り、山を積み上げて麻雀をはじめる。

最初の天和　1―2

京太郎はゴクリと生唾を飲み込んで自分の手牌を覗き込んだ。
配牌は並、よりは少し悪い程度だ。
平和を作ろうと守り重視でゆっくりと打ち回していると対面に座る鷲鼻の大男が簡単にタンヤオをツモ和了した。
京太郎は気を引き締めて自分の出せる力を全て出し切って勝利することを考える。
「チー、チー、チー……　ロン、一通」
アルシーアル麻雀では鳴いて役がなくとも和了することが出来る。それなら、守りこそ薄くなるが確実に役を作り相手を翻弄することが出来る。だが、危険なら確実に降りる押し引きが必要だ。
次の配牌は鳴かないで作ることが出来る物だったので、ゆっくりと門前で手を作り上げて――
「リーチ」
この時代に登場した役の名前を高らかに叫んだ。
すると次の順にツモ和了し、
「リーチ、門前、平和、タンヤオ」
この局は京太郎の独壇場だった。日本式麻雀で培ったセンスと守りの技術で放銃を一度も許さないでジワリジワリと点差を広げ、この半荘は圧倒的な勝利で幕を閉じた。
米兵達は若干の苛立ちを見せながら信じられない枚数のお札、それも全て百円札を卓の上においた。
震える手をどうにか押さえつけて、お札をゆっくりと手に取った。
体中に行き渡る脳内麻薬、それを分泌させるのにこの大金は少なくはない額であった。
スーツのポケットの中に全てのお札を収納して水を一杯くださいと後ろで点数を教えてくれていたママに頼む。するとわかったわと言ってガラス製のコップに入った水を一杯持ってきてくれた。
まだ手が震えている。右手に持たれたコップの中の水がブルブルと震えているのがよくわかる。

「京太郎、小便に行こうぜ」
「ああ、わかったよ……」
ドサ健が対局が終わったと同時に京太郎をトイレに誘った。
「はじめて聞く役ばかりで物凄く緊張したぜ……」
「何位だったんだい？」
「ん？　一応は二位で場代と一週間分の飯代は手に入れた。でも、今日は流れが悪い。先に帰らせてもらうぜ」
ドサ健も手が震えているのが見えた。
京太郎はポケットの中に入っている札束を握り、自分自身にまだ自分に流れがあるかどうかを尋ねてみる。返事はない、ただ、あるのは心臓のゾクゾクとした気味の悪い音色だけだった。
ドサ健はそのまま店を後にして店に残ったのは京太郎だけになった。
「ママさん、今日はもう帰るよ……」
点数計算をしてくれていたママにそう告げるとさっきまで麻雀を打っていた米兵が京太郎の元にやってきてもう一局打てと言ってくる。
正直、京太郎はこれ以上勝負をしたい気分ではなかった。これ以上の勝負は自分の心の揺れ方が尋常じゃないし、あの大量の札束が出された瞬間がフラッシュバックする。もし、その札束が自分の持っている札束なら？　もう勝負をしたくないと思うのは当たり前である。
だが、この店にいるすべての米兵達が京太郎のことを睨みつけた。そして、威圧感がゆっくりと京太郎を卓につかせるのだ。
米兵が下手糞な日本語で京太郎にこう告げる、差し馬をやらないか？　と……
差し馬とは、麻雀の勝負においてどちらが上の順位かを争い、もし、自分が相手より低い順位ならば差し馬で提案された金額を払い。逆に高ければそれを受け取る。
京太郎は首を横に振ろうとしたが、周りの米兵達がそれを許さない。
「チー、チー、ロン」

先ほどと同じように鳴きを駆使した戦術で少しずつ相手を翻弄する。
流れ自体は京太郎に存在した。配牌もツモも、そのすべてが京太郎の肩を持ち、連勝の香りが漂い始めた。
だが、違和感が京太郎の背中を漂いはじめた。
さっきまでの流れが消え失せ、米兵達が少しずつ和了しはじめてきた。流れが尽きた瞬間である。
広げていた点差が徐々に迫ってきて、京太郎は青褪めた。だが、まだ、自分がトップに立っている。負けていない、逆に勝っているんだと言い聞かせて牌を握った。
〔⑧⑥北⑧３２北⑦１北北⑧三三〕
こんな配牌が入ってきた。京太郎はこれがテンパイしているとは思わず、とりあえず〔北〕をカンした。
すると嶺上牌は〔⑤〕だった。
京太郎は冷静に綺麗に手牌を並べていると思いもよらないとダラダラと汗を流し――
「つ、ツモ……　天和」
その場に居合わせた人間が唖然とした表情になる。確かに和了っているのだ。
「おい！　それのどこが天和なんだ!?」
対面に座る鷲鼻の男が目に見えた苛立ちを見せながら京太郎に掴みかかった。
京太郎は凛とした表情でこれが天和以外の何なんだと逆に質問すると鷲鼻の男は二回ツモしているのだから天和は消える。これはただの門前と嶺上開花だと主張した。
すると後ろに立っていたママが鷲鼻の男をなだめて、流石に天和は無理だから満貫で許してあげてと京太郎に提案した。京太郎は周りの視線に負けて満貫分の点棒を受け取り勝負に戻った。
京太郎にもう一度流れが戻り、勝利が確定的となった。

最初の天和　1―3

流れは完全に京太郎のもの、そして、今はもうオーラスだ。
勝利は確定的であり、京太郎以外のこの場で牌を握っている人間に勝機などない。あるとするならば、京太郎が満貫、または役満を振り込まないかぎり。
京太郎は波打つように跳ねる心臓の音に酔いそうになる。だが、これを超えたら最初の勝利の金額の倍が自分のものになる。欲が体中を巡り、その欲が米兵達の運を吸い取る。
「ん？」
京太郎は違和感に気がつく。下家の米兵が不可解なまでに山を整えている。それ以外にも対面の鷲鼻の男がツモる時に一枚手牌が減っているような気がする。
「（――まさか!?）」
京太郎は目を凝らしてこの場にいる全員の動きを深く観察した。するとボロボロと下手糞なイカサマを披露しているではないか。
京太郎は鷲鼻がツモる瞬間に腕を掴み、手の中に含まれている二枚の牌を指摘しようとする。
ガチャリと金属音が響き渡り、その場にいる全員を凍りつかせた。
上家の差し馬をしている米兵が『Ｍ１９１１Ａ１』と呼ばれる拳銃を京太郎に向けて引き金を引く準備をしている。あと少し指が動けば、撃鉄を叩いて４５ＡＣＰが発射される。
「ジャップ、汚い手で触るんじゃない」
「ジャック！　店で銃を抜くのは禁止だよ!!」
「黙りな、こんなジャップ風情が俺達に歯向かうからだ」
京太郎は恐怖で体が震える。もし、この手を放さなければ自分の命は消え失せる。だが、ここで手を放してしまえばチョンボとして満貫払いで自分の敗北が決まってしまう。
米兵達はニヤニヤと京太郎の選択を眺めている。
京太郎はゆっくりと手を放した……
◆◇◆◇◆

ボロボロの雑巾のように殴り潰され、有り金を全て奪われ、そして、心に多くの傷を彫りつけられた。
殺してくれと小さな声で呟く。だが、京太郎を殺してくれる人間なんていない。
京太郎は血の味がする口で大きく息を吸い込み、自分が出せる全力の声で馬鹿野郎と叫び散らかした。
「……日本は戦争に負けたが、日本人は負けてないんだよ!!」
涙と鼻水を流し、雲一つない大空に暴言を吐き続けた。
だが、勝負の世界では引いた者が敗者。あの場所で銃を抜いた米兵を非難した者は存在せず、逆に掛け金が足りていなかった京太郎を非難するものが殆どだった。
「米兵なんてあんな奴らばっかりだよ。坊や、あそこでよく手を放せたね……偉いよ」
バーのママが泣いている京太郎の元へやってきた。だが、そんなことは気にしないで京太郎は夜空に暴言を吐き続けていた。それくらい悔しく、そして、苦しいのである。
ママは京太郎に肩を貸して自分の家に連れて行った。
「坊やは偉いよ。意地を通して死ぬより生きることを選んだ」
「死んだ方がカッコイイですよ……手を放した自分が情けないです……」
ママは京太郎の頬を思い切り叩いた。そして、優しく、強く抱きしめた。
ママは説教をするように死んだ方が良いなんて考えるな、生きていたら良い事もあるし、美味しいものが食べられる。楽しい賭博も出来るし、お酒も楽しめる。煙草も吸い慣れたら美味しい。生きていれば楽しいことが絶対にあると……
京太郎はママに案内されるまま、ベットに転がり、体を何度も重ねあった。
彼女と体を重ねると自分の辛い思いを忘れることが出来た。
何故、戦後初期の日本にタイムスリップしたのか、
何故、自分が麻雀で勝てなかったのか、

何故、牌に愛されないのか、
何故、好きな人は振り向いてくれないのか、
そんなのどうでもよくなった。ずっと恋心を抱いていた原村和の姿さえ忘れ、ただ、ママと体を重ねた。
そして、どんな時よりも深い眠りに付くことが出来た。

不吉な金曜日　1―1

あの虚しい戦いからそれ相応の日数が過ぎ、京太郎の傷が完全に癒えた頃だ。

京太郎はママの家に半ば居候として住まわせてもらい。亭主が帰ってきていない日、そして、ママが男を欲する時に快楽に溺れる時間を過ごしていた。

この際だから彼女の説明をさせていただこう。彼女の名前は八代雪。当時、日本軍が占領していた大東亜共栄圏の一国、インドネシアのセレベスの生まれであり、戦時中は南アジアで軍の仕事を請け負っていたらしい。年齢はあのようなバーで大きな顔をしているのだから、京太郎よりそれなりに年上なのだろうと思ったが、京太郎より一回り年上というだけで二十五～六程度である。失礼であるが、小鍛治プロより年下である。

旦那はこの辺りでは顔の効く人間らしく、詳しくは説明してくれはしなかったが、一般人なんかより何十倍も権力を持っていて、気に触れば殺されかねないということは理解できる。

「嫌な話だな……」

「どうしたんだい？」

京太郎は酷く沈んだ顔でちゃぶ台に置かれている札束を睨みつけた。だが、その札束が京太郎の不利益になるわけではない。逆にこいつは京太郎の純増利益であった。それでも、こいつを綺麗な眼差しでながめることはできなんだ。

京太郎はママの後ろ盾を持ってあの店で麻雀をある程度打つようになった。その途端に米兵達は銃を抜くことはなくなり、普通の麻雀を打ってくれるようになった。連日連夜の勝利。生まれ持っての運の見極め方と勝負強さで敗北していないというわけではないが、勝ち越している。だが、それが京太郎の心を抉る。

「坊や、気が付き始めてるだろ？　客が少し減ったことに」

ママはニヤリと京太郎の考えを見透かす。まったくその通りである。

京太郎が麻雀を打つようになって少し、だが、確実に減少した。それは勘の良い京太郎ならわかっている。だからこそ、自分の打ち方に疑問を持ちはじめているのだ。もし、これが部員達との慣れ合いの麻雀ならともかく、金銭が飛び交う戦争で勝ち続けるのは愚策。ある程度の蜜を塗らなければならない。

「坊や、アンタはプロになりたいんでしょ？」

「プロ？　……　いやいや、俺じゃあプロなんて」

京太郎は自分が住んでいた時代のプロのヴィジョンが走馬灯のように流れはじめる。

――三尋木咏。

――戒能良子。

――瑞原はやり。

――野依理沙。

――小鍛治健夜。

絶対に勝てない相手というものは必ず存在するものである。

京太郎ではこの五人のプロには勝てない。本来の麻雀であれば、素人でもプロに勝利する可能性を秘めている。だが、彼女達は例外であり、素人でも玄人でも勝利できるかわからない。正直、全国大会で優勝した程度の麻雀打ちに翻弄されている時点で勝ち目などありはしない。

「大丈夫、プロなんて朝から昼まで打ってたら自然となれるよ。でもね、勝ち過ぎるのはプロなんかじゃなくて雀ゴロってやつなのよ」

「雀ゴロ……」

ママの言葉が矢のように突き刺さった。

確かにそうだ。自分より弱い相手を一方的に叩き潰して金を巻き上げる。それだけ、それだけでは芸がない。誰も面白くない。

「プロってのはね、お客の力が6なら7、3なら4、10の相手なら11、12の相手なら全力で叩き潰すのよ。――プロはね、どの相手でも好勝負をするのよ。そして、お客を喜ばして、遊ばせて、場代を取る。それが本物のプロよ。でも、時には12、つまりはサマを使って場を荒らすマナーの悪い雀ゴロがいるの――そいつは全力で叩き潰

す。これもプロのプロたる由縁よ」
正論、圧倒的な正論だった。
振り返れば、どの賭博場でも京太郎は勝利を重ねていた。自分だけ甘い蜜を舐めていた。そんなのはプロではない。ただの質の悪い勝負師に過ぎない。
「ママ……俺はどうしたらプロになれる？」
酷く細々とした口調で京太郎はたずねた。
するとママはニヤリと笑って明日から特訓をはじめるわと告げた。
◆◇◆◇◆
自分に出来る精一杯の接待麻雀をママの店ではないレートの低い店で打っては見たものの、自分が振り込めば勝てる戦いも勝てなくなるし、流れも振り込んだ相手に呑み込まれてしまう。運の流れを誰よりも重視する京太郎にとって、自分の流れを他人に譲るのは酷く滑稽なことなのだ。
ママの家へただいまと告げて入るとニヤニヤとした表情で麻雀牌をかき混ぜているママがいた。
「今日から特訓よ」
「プロになるための特訓ですか？」
「ええ、座りなさい」
ママは牌をかき混ぜるのをやめて京太郎の顔をにこやかに覗き込んだ。
「積み込みは出来る」
「積み込み？　……山に自分が欲しい牌を仕込むことですよね。米兵がよくやってる」
「あれは左手芸、雀ゴロが使う卑怯で見破り難い技ね。本当の積み込みを見せてあげるわ」
得意な手付きで山を積み上げる。そして、親が取る部分を捲っていくと――一通の積み込みが完成しているのである。
〔一■二■三■四■五■六■七■八■九〕
信じられなかった、山を積むのに不順な動作は一つも見当たらなかった。それなのにこれ程の積みこみが出来るなんて……

京太郎は山を崩して自分も必死に順子を山に仕込んでみた。
〔三■四■五■1■2■■■■■■■〕
「はじめてにしては上出来じゃない」
「一面子だけですよ……」
「いいや、右手で必要な牌を拾って左手でそれを隠す。それをあの一回で理解したなら上出来よ」
「でも、速度が足りない……」
「ええ、そこら辺の雀ゴロの方がもっと早く積めるわね」
京太郎は必死に牌を握り、プロになろうと歯を食いしばった。その先に自分よりずっと強い部の仲間の背中があると信じて。

不吉な金曜日　1―2

京太郎は朝から晩まで稼ぎに行くことを忘れて積み込みの練習を行った。

そのお陰である程度の速度で積み込むことが出来るようになり、一色元禄、三元牌元禄を仕込むことが出来るようになった。勿論、実戦で使用できる領域の完成度だ。

それ以外には、左手芸、爆弾、キャタピラ、ドラ表示牌すり替え、ギリ技などなど、サマ師として十分過ぎる程の技を習得した。正直、習得し終えて達成感よりもイカサマにすべてを頼ろうとしている自分が恥ずかしくなったと心のなかで思っていた。

「坊やも大分、様になってきたじゃない。次の段階に移行しようかしら」

「次の段階ですか？」

ママは箪笥の中から煙草を取り出した。

銘柄はゴールデンバット、日本で最も歴史がある煙草だ。

「次は通しと壁の練習をしましょう」

「通しと壁？」

「ええ、今から説明するわ」

ママは通しと壁について説明した。

通しとは、コンビで麻雀を打つ際に自分の和了り牌を教えたり、卓下での牌の交換の際に使用する特定のサインのことである。通し有ってこそのコンビ打ち、通しが無ければコンビ打ちは成立しない。

壁とは相手の手牌を見て聴牌しているか、聴牌しているのなら和了り牌を教える人間のことである。これも通しを使用する。

京太郎はママから通しのやり方を教えてもらい、必死に暗記した。

「通しは煙草を使うのが一番手っ取り早いわ」

「煙草ですか……　俺、未成年ですよ？」

「いいのよ、貴方くらいの子供が煙草を吸ってるなんてふつうのことだから」

京太郎は渋々ゴールデンバットを受け取り、一本口に含んで火を付

けて吹かしてみる。
「それは吹かしているだけよ、こうやって吸うのよ」
ママはバットを取って口に含み、呼吸をするように煙を吸って、ゆっくりと吐き出した。
「両切りタバコだからあんまり煙を吸い込み過ぎるのはダメよ。煙が濃いからね」
「わかりました……」
京太郎ももう一度煙草を受け取り、ゆっくりと肺の中に煙を入れた。
「ゲホッゲホッ!?」
「まあ、肺に入れたそうなるわよね。少しずつ慣れなさい」
「はひっ……」
◆◇◆◇◆
煙草を加えて壁役のママの姿を見る。まだ聴牌はしていないが、高い手だから振り込むな。そう通している。京太郎はママの危険信号が出るまではゆっくりと打ち回し、危険信号が出た瞬間に現物を叩いていく。
ママが卓に入った時は煙草を使った通しで客と善戦する。
イカサマを使う客が現れた時は完膚無きまで叩き潰し、プロたる由縁を見せつける。
京太郎はまだまだ半人前だが、プロとして麻雀を打てるようになった。
「坊やもこれでプロの仲間いりね」
ママは京太郎のことを優しく褒めた。だが、京太郎は下を向いて溜息を吐き出した。
「不思議なくらい勝てますね。そして、不思議なくらい客を喜ばせられますね……」
「ええ、それがプロですもの」
「――でも、麻雀本来の面白さはない」
虚ろな瞳で星々が輝く空を見上げる。
京太郎は運の流れを誰よりも理解して際どい大勝を続けてきた。

だからこそ、価値の確定した戦いに快感を得られない。本来、ギャンブルというものは、不安定な確率の中で勝利する快楽を味わうものなのだ。その不安定な確率が１００％の勝利に豹変してしまえば、快楽など存在しない。ただの作業に変わってしまうのだ。

ママは京太郎の頬を思い切り殴った。パーではなく、グーでだ。

京太郎は地面に這いつくばって何故、自分が殴られたのかを考える。だが、答えを出す前にママがその答えを高らかに説明した。

「坊や！　確かにアンタの流の読み方は誰にも真似できない最強の技だよ。だけど、それ以外の技はどうだい？　まだまだ半人前、ようやく実戦で使える程度。イカサマはね、他人を楽しませるだけじゃなくて、もし、一人で旅立つ時に大きな盾になるのよ……」

ママは怒って這いつくばる京太郎の姿など眼中にないと言わんばかりにその場を後にした。

だが、これだけは言える。ママは京太郎が自分の元から巣立つ前に自分の出来る技と生き方を叩きこもうとしているのだ。それくらい、京太郎を愛しているのだ……

不吉な金曜日　1―3

その日の天気は嫌でも目に焼き付いていた。
晴天、戦争が終わったことを心から感じさせる程の晴れ晴れとした晴天であった。
そんな晴天に似合って今日という日は米兵達の給料支給日であり、ママのクラブのＶＩＰ席には大枚を持った米兵達がギラギラとした鋭い表情でごった返していた。そして、その大枚を手に入れるために店の店員達も酷くギラギラとしていた。
京太郎はそのギラギラとした雰囲気に少しだけ気負いしていた。普段なら、自分も闘志をたぎらせてかけに向かうはずなのだが、今日という日は酷く胸騒ぎがしてならなかったのだ。
「流れが、流れがないんだよな……」
京太郎は普段は麻雀しか打たないのに不思議とルーレットの前に立ってチップではなく百円札を赤の場所に置いた。するとルーレットは赤の場所に止まり、倍付けの二百円になって帰ってきた。次はその二百円をまた赤の場所において賭けをはじめる。そしたらまた、倍になり、四百円になって帰ってきた。
だが、これが京太郎の運の流れの読みを狂わせる。まるで、今日は何か仕組まれているように勝てるが、その裏に何か、何か大きな不運という津波が訪れそうという不思議な不安感が出来上がっていた。
京太郎は冷や汗を袖で拭い、トイレに向かった。そして、ルーレットで勝利した四枚の百円札を靴下の中に仕込んで久しぶりにチンチロ部落にでも足を運ぼうかと店を出た。
◆◇◆◇◆
気分転換にチンチロ部落に足を運ぶとお凛が嬉しそうに京太郎のことを出迎えた。京太郎は苦笑いを見せながらもお凛の隣りに座って特別運の流れを感じることなく金銭を惜しまないで六面体を回した。
「クラブでプロやってるらしいじゃないの？　景気はどう」
お凛はニヤニヤと自分が紹介したクラブのことを尋ねてきた。

京太郎は良いお師匠さんに巡り会えたから景気は物凄くいいよと言い、美味しいご飯が毎日食べられているとにこやかに告げた。
「じゃあ、私のスナックにも来てちょうだいよ！」
「俺、未成年ですよ？」
「コーラを大量に用意しておくから♪」
京太郎は苦笑いに近い愛想笑いを見せてサイコロを回した。
久しぶりにサイコロを回しているとドサ健や上州寅のことを思い出す。よく考えれば、自分の博打打ちとしてのはじまりはこのチンチロ部落からだと酷く思う。そして、流れ流されて社会的にみたらプロ雀士として生計を立てている。
京太郎は胸がいっぱいだった。
部活で麻雀を打っている頃とはまったく違う、圧倒的な成長と際どい勝利の連続。それが現代に居た頃の京太郎の消えかけていた麻雀に対する認識、そして、何よりも重要な勝利への欲。喉から手が出るほど欲しいと思える欲が芽生えた。
誰がどう見てもプロ雀士、麻雀で生活しているプロ雀士、雀ゴロなんていう輩とは違う。本物の麻雀打ち。
京太郎にとって、今、今この時代に打つ麻雀こそが本物の麻雀。
オカルトを駆使する打ち手なんかよりずっと、ずっと戦っている快感が得られる。勝利の美酒に酔える。
だからこそ、薄れてきた。オカルトに対する恐怖が……
「いたいた！　京太郎さん!!」
ママのクラブのバーテンダーが青褪めた表情で部落の中に入ってきた。
京太郎は酷く不思議そうな表情で何かあったのかとバーテンダーに尋ねてみる。するとママが旦那さんが会わないといけないのに横浜で米兵達がママの足止めをしている。だから、代打ちとしてすぐに店に向かって欲しい。車は用意していますからと答えた。
京太郎はお凛にチンチロで勝利していた二百円をコーラの仕入れ代だと渡してバーテンについて店に向かった。
◆◇◆◇◆

京太郎はバーテンダーにママは誰と麻雀を打っているのかと質問したが、米兵とだけ告げてそれ以外は知らないと答えた。
これは京太郎の持論だが、ママは旦那に会いに行くついでに知り合いの店に顔を出して成り行きで麻雀を打ったんだ。そして、米兵達がママを拘束して、代打ちとして自分を連れて来ている。酷く不毛利な内容だが、ママには色々と恩がある。それに、数居る知り合いの中で自分を選んだことを誇らしく思った。
京太郎は煙草を咥えてゆっくりと暗くなっていく空を見上げた。
「ママの時間は間に合うのか？」
「八時までに来れれば十分です。横浜に着いたらすぐに代わってくれれば問題ありません」
「わかった」
京太郎は二口しか吸っていない煙草を窓から捨てて復興が進んでいる街を眺めながら横浜の街まで向かった。
◆◇◆◇◆
ようやく横浜に到着し、バーテンダーに案内されるまま道を歩いていると米兵達の姿が増えてきた。そして、甘い危険な匂い。他の言い方を使えば流れの歪みを感じはじめる。
近い。ママは近いと京太郎は直感的に感じることが出来た。
そして、バーテンダーが足を止めた三階建てのビルを見ると日本語で皮肉めいた言葉が書かれていた。
日本人立ち入り禁止。
京太郎は今日もまた米兵かと苦笑いを見せて店の中に入った。
京太郎は気付いていなかったが、今日は十三日の金曜日だということを……

不吉な金曜日　1―4

店の中に入ると同時に卓を囲んでいた四人、二世が一人、白人が二人、それにママ。が一斉に京太郎のことを見た。
京太郎は臆することなくゆっくりとママの元へ歩み寄り。
「今日は旦那さんと待ち合わせをしてるんでしょ？　俺が代打ちとして打ちますから」
「今日のレートは馬鹿みたいに高いから慎重に打ちなさいよ。……ごめんね」
ママが英語で自分は旦那と待ち合わせがあるから京太郎が代わりに卓に入ると英語で説明した。だが、二世が途中で喋らせることをやめた。
「オー、ノウ。私、ママとそこの坊やの話、わかる。帰れないよ、ママ、ダメだよ」
二世は鋭い表情と鋭い口調でそう言葉を投げつけた。
ママはムッと顔をしかめて、どうしてなのテディと二世の名前を呼んだ。
「あたし、用事があるのよ。最初に言ったでしょ？　八時になったら店を出るって」
「ダメさ、ママの一人勝ちじゃないか。勝ち逃げは許さない。」
「勝ち逃げなんかじゃないよ。この坊やが私の代わりに打つから」
「確かに、ママは八時に店を出るといった。でも、それが夜の八時とは聞いてない。朝の八時でしょう」
「わからない人ね……」
ママは席を立ってハンドバックの中から財布を取り出して京太郎に渡した。
京太郎はわかりましたと頷いて卓にはいろうとするが上家に座っているテディという二世が座らせようとしない。
テディは同席している白人達にママは逃げようとしているとホラを吹き込み、是が非でもママを返そうとはしない。京太郎はどうすればいいのかとママのことを見た。

ママは英語で京太郎が代わりに打つと何度も説得するがそれでも三人は聞く耳を持たない。
「いいかい、この島は今、誰が仕切っているんだい？　僕達が怒ったらどうなるか……」
ママは煙草に火を付けて手牌を立てた。
京太郎はトイレに行くと嘘をついて三人の手牌を見て聴牌しているかどうかをママに知らせて本当にトイレに向かう。そして、トイレの後はバーテンダーにママは今日は来れそうにないと説明してくれと頼んで店に戻った。
「ねえ、レートを上げましょう。誰かが破産したらゲームは終了になるでしょ？」
店に戻るとママが高いレートを更に跳ね上げようと提案した。
ママは京太郎に有り金をすべて出してとお願いした。多分、誰かに差し馬を提案して少しでも残金を減らしてやろうと考えたのだろう。京太郎はわかりましたと頷いて自分が持っていたお金、札束と呼べるお金をママに渡した。すると三人は口笛を吹いて、その札束を見た。
「誰か差し馬をしましょう？」
「なら、僕がやるよ」
テディがニヤリと笑みを見せて京太郎の所持金と同等の札束をチラつかせた。
京太郎は狂っていると思いながらも、テディと対面の白人の手牌が見える位置に椅子をおいて聴牌したら通しを入れられるように腰を下ろした。
ママは京太郎の意図を素早く理解してただ、鋭い視線で了承するだけであった。
「ロイ、ティック、ゲームを続けるよ。さァ！　挽回だ!!」
対局がはじまり、やはり優勢だったのはママだった。
相手二人の聴牌がまるわかりでいざという時にはその美しい積み込みで高いてを作ることが出来る。それに、ママは誰よりも相手への配慮を怠っていない。もし、その配慮を怠ってしまえば積み込みが出来ないようにマークされて自由に打てなくなってしまう。だが、彼女

にはそれがない。だからこそ、この地位を確立することが出来たのだ。
京太郎はママの動揺のない安定した打ち方に胸を撫で下ろし、ポケットの中に手を入れた。
これは聴牌しているかどうかの通しであり、もし、どちらかが聴牌したらテンパイした方の手をポケットから出す。これだけでも勝率はぐんと跳ね上がる。
オーラス、親、ママから見れば対面のディックにいい手が入ってきた。
〔東中中北③⑤⑥⑧二五九６７７〕
配牌はなんということもない手だったのだが、ツモが良かった。筒子が川の流れのように押し寄せて、あるいはこのオーラスで捲らないと行けないという気迫がそういうツモを呼んだのか、こういう配牌に変化した。
〔中中①①②③⑤⑤⑥⑧⑨６７〕
ディックは〔中〕を鳴いて連荘をしようと構えているのだが、中々、思う牌が出てこない。
だが、〔中〕が出ない間に不思議に手が育っていき、薄い、だが、確実に筒子の清一色をテンパイした。
〔①①②②③⑤⑤⑤⑥⑦⑧⑨⑨〕
京太郎は慌てて懐から煙草を取り出して口に加えて高い位置で火を着けた。これは捲られるという通しである。
だが、ママは京太郎の通しを見ることなく目を瞑っていた。
その時の顔と役はとても印象的だった。まるで女神のような顔でゆっくりと手牌を倒して――
〔一二三四四四五六七七八八九〕　ロン〔六〕
惚れ惚れとした。
◆◇◆◇◆
差し馬を続けて三人の懐は完全に崩壊した。そして、賭ける金がなくなり勝負をすることができなくなってしまった。これでようやくママは開放される。

時計で時刻を確認すると午前０時と表示されていた。だが、京太郎にとって、この数時間は数十秒程度にしか感じられなかった。それくらい、濃厚で詰め込まれた大勝負であったということだ。
テディはまだ勝負を続けたいようであったが、二人の白人が勝負を切り上げて次の機会に倒してやると意気込んで店を出てしまったので勝負を続行することは出来ない。
「負けたよ、ママ」
テディは二人の白人を送った後にもう一度店の中に戻ってきた。
「車が無いだろ？　東京まで送ってあげるよ」
ママも京太郎もテディの言葉を信じて彼の車の後部座席に腰を下ろした。
京太郎もママも闘牌の疲れからか、車の中で眠ってしまった。
「どこなの？　ここはどこ？」
というママの声で京太郎は目を覚ました。
「東京さ――」
運転席に座るテディからの返事はとても冷たく、冷徹であった。
「東京はわかるわ、東京のどこなの？」
「さぁ、そいつは日本人の方が詳しいんじゃないの」
左手に大きな川、右手には畑が続いていた。東の空が白みががっていたが、まだまだ暗い。
「多摩川、かしら――」
車が止まった。
「ここは東京じゃないわよ」
「だが、送ってきたぜ。ガス代をいただこうか」
「なによ、それ」
「ガソリンを食ってるんだよ」
「……　そうなの、いくら？」
テディは拳銃を突き付けてママのバック全部さと洒落た口調で呟いた。
「冗談でしょ……」
「冗談じゃないよ。本当は僕が大勝する予定だったんだけど、今回は

ママに勝ってもらうことにしたんだ」
テディは白々しくそう告げてママのハンドバックを奪い取った。
京太郎は何もすることが出来なかった。
「さぁ、大人しく車からおりてくれ、撃たないよ、撃つもんか。でも、鉛球は入ってるんだ。いいかい、この島を取り仕切ってるのは僕達――アメリカ人なんだからね？　ジャップが大きな顔をするんじゃないよ。――さぁ、坊やからおりるんだ」
京太郎とママはただ呆然と走り去っていく車を眺めた。
数分間の沈黙の末にママはゆっくりと崩れ落ちた。
京太郎が見ていた強くたくましいママの姿など毛ほどもなく、ただただ、普通の二十代後半の女性――八代雪という女性の姿を見ることが出来た。本当は彼女も弱い存在なのだ。
「……　宿を探しましょう」
京太郎はルーレットで勝利した四百円を靴下の中から取り出して、宿を探した。
そして、宿を見つけて、あの日――はじめて出会った時のように激しく重なりあい。愛しあった。
……　それ以来、京太郎は彼女と会っていない。会えていない。

ガン牌野郎　1―1

あの日の夜、京太郎は多くを失った。
ママは姿を消し、家には家具一つ、鼠一匹住み着いてはいなかった。
クラブは跡形もなく撤去され、賭け事を行える場所なんて存在しなかった。
京太郎の心の中に残ったのは、ママと愛しあった生暖かい時間だけだった。
今日は皮肉なことにクリスマスだ。アメリカ人でもないのにジングルベル、ジングルベルと日本人が騒いでいる。お前達は自分達が負けた国の風習を素直に受け入れるんじゃないよと心の中で皮肉を告げた。
ある程度通い慣れた雀荘の中に入ると四人しか客が入っていない。
京太郎はクリスマスの偉大さに肩を落とした。
玄人すら、クリスマスには家族と過ごすんですね、そうですね……
「おや、京太郎くんじゃないですか」
「清水さん」
髪の毛を七三に分けた背のひょろ長い男が京太郎の姿を見て嬉しそうに笑いかけた。
京太郎は勝っていますかと質問してみるがそこそこだよと謙遜されてどのくらいの儲けが出ているのか知ることが出来なんだ。でも、清水という男は京太郎と同等、いや、それ以上の玄人であり、下手に勝負に負けるような器ではない。だから、勝っているのだろう。
彼との出会いはママのクラブでの打ち合いだった。
いつものようにプロとしてクラブで打っていた京太郎だが、その日、その人にだけは勝てなかった。それがこの清水という男だ。そして、京太郎は数個の技を清水から習得している。
「京太郎くん、煙草、やめたのですか？」
「はい。ママと縁が切れて体に悪いからやめました」
「そうですか……　愛煙仲間が減りましたね」

清水はラッキーストライクを口に含んで煙を吸って吐き出す。
煙草を楽しんだ後、清水は面白い場所を見つけたんですとニコヤカに返して付いて来ますかと尋ねる。
京太郎はレートはどのくらいなんですかと必然的に返すと――千点棒一本五百円と背筋が凍る金額を提示してきた。
京太郎は懐の額を確かめてゆっくりと考えた。
やれない勝負ではないが、これが消し飛んだら路頭に迷うのは当たり前。
ママのクラブも無くなったし稼ぎ場は殆ど消えたと言っても良い。
この際、大きく勝負して住む場所と安定した狩場を見つけたいと思っていた京太郎は少しだけ悩んだ。
そして、結局は清水の背中に付いて行き、その背筋の凍る勝負、勝負師達が集まる場所に足を運んだ。
店の中には一人の客とマスターが一人だけだった。流石にクリスマスとなると玄人でも、玄人でも家族と過ごすのだろう。だが、テクテクとこの場所にやってくる足音が聞こえた。
二人、酒によった豪勢なスーツを着た男が二人入ってきた。
「俺から打つよ」
京太郎は稼ぎ時だと思い、札束を持って卓にはいろうとする。
が、清水がそれを止める。
やはり、清水も稼ぎたいのかと思い京太郎は瞳を覗き込む。
「代わりばんこで打ちましょう。そしたら五人で打てるでしょう」
清水は一局精算のルールを提示し、放銃した人間が五人目と交代して打つことを提案した。
京太郎は壁をやって欲しいのだろうと思って必然的に酔っている二人の客の後ろに椅子をおいて壁になった。
清水は流石と言わんばかりに軽い上りだが平和をロンアガリして京太郎に席を開けてくれた。
京太郎は不思議に思った。壁役をして欲しいならツモ和了で弾き出すのはあまり良いことではないと。
だが、卓に入れるのなら入るしかない。

数巡後、京太郎の手牌はこのようになった。
〔１１１２３３４５７８〕〔中中横中〕
普通に混一色の聴牌でこのレートなら数カ月分の部屋代になる。
京太郎はツモ和了り出来ることを願ってゆっくりと山から一牌の牌を持ってきた。だが、やってきたのは〔④〕であり、京太郎の上がり牌ではなかった。
「すいません、本当にすいません。ロンです」
京太郎はオヤ？　と清水を見た。
コンビ打ちをしているわけではないのだが、ある程度の考慮をして麻雀を打っていた京太郎は清水のこの軽い和了りに少しだけ不信感を感じはじめる。
それに付け加えてこの和了り、
〔①②③④④⑤⑥⑦⑧⑨〕〔横三四五〕　ロン〔④〕
これは少し可笑しい。
鳴いて一通を作るのは簡単だ。でも、こういう風に一通の牌を鳴かないで一通を作り上げるのは難しい。
京太郎はこの局、誰か鳴いたかを確認してみるが誰も鳴いていない。じゃあ、積み込みではないのだろう。
不信感が加速する。
京太郎は鳴きの一通の代金を払って清水の後ろに椅子をおいて見物してみた。
――また一通が出来上がっている。
配牌事態はある程度の手だったのだが、それがこういう手に化けたと思うと少しだけ可笑しい。それに付け加えて清水の打牌も少し変だった。
〔二二１２３４６７８９②③④⑥〕
一通の聴牌なのだが、何故か清水は不要な〔⑥〕を着ることなく、必然の如く〔６〕叩いてた。その次のツモは〔⑧〕であり、これでもう一度聴牌に持っていた。清水は〔１〕を迷うことなく叩いて、その次の順にロンと甲高い声を上げた。
「二十日くらい前に下ろしたばかりの牌を使ってるのにもう覚えてし

まったのか」
「覚える？」
マスターが小さい口調でそう告げたので京太郎も同調してその内容を確認してみた。するとガン牌だよと麻雀を打っている四人に聞こえないように答えた。
京太郎は確かにガン牌をしているならああいう和了りもわからなくはないと思ったが、ガン牌というものは本来は三元牌や風牌なんかに目印を付けてガメるものなのだ。それなのにああいう風に筒子や索子をガン牌していると思うと少しだけ可笑しいと思える。
だが、清水がガン牌をしていることには変わりはない。京太郎は対策を練った。
もう一度卓に座って清水の瞳を見ていたら申しませんよとニコヤカに笑って麻雀を打った。
京太郎は不信感を感じながらも自分の持つ力すべてを出し切ってこのガン牌に対抗しようと思ったが、そうもいかないで放銃こそしないものの種銭を少しだけ増やすことしか出来なかった。
◆◇◆◇◆
「面白いクラブだったでしょ？」
清水は問いかけるように京太郎に告げた。
「はい。でも驚いたな……　怖い麻雀をやっちゃった」
「はっはっは、何故？」
「最初の〔④〕、あれ、どうやったの？　俺にも出来る？」
清水はニコヤカに笑っていいですよとガン牌について説明した。
一番わかりやすいのは筒子で横の塗装が少しだけ荒いものが多く、〔③〕〔④〕〔⑦〕〔⑨〕はすぐに見分けがつくらしい。それ以外には彫り込みの端に少しだけ目印があったりとガン牌なんて案外簡単だと説明した。
だが、京太郎はそれでは筒子だけじゃないかと反論した。
「まぁ、そのうちコツを教えますよ」
「でも、貴方みたいな玄人は初めてですよ」
「アメリカ人の方が楽で金を巻き上げられるからね」

「えっ？」
「ママのクラブが閉まったから他のクラブを教えてあげるよ。京太郎くんは筋がいいからね」
清水は京太郎の肩を二回叩いてそのまま夜の街に消えていった。
京太郎はお腹がすいたなと思い。ドサ健が通っているカニ屋に足を運ぼうとした。
その時、キキキキと轟音に近いタイヤの擦れる音が響いた。
清水がだらりと地面に倒れて米兵のシボレーに担いで乗せられた。
京太郎は急いで後を追ったが、車に勝てるはずがない。
京太郎は小さく、クラブ……　教えてもらえなかったな……　と夜の街に告げた。

夜明けの譜　1―1

清水さんに紹介してもらったクラブで打った後に、上野のカニ屋に足を運んで、高い夕飯にありついていた。京太郎が物静かに夕飯を食らっているとドサ健が店の中に入ってきた、浅黒い少年二人を連れて。

「よお、景気はどうだ？」

「高級住宅街に家一軒建てられるくらい」

「それは凄い。あのクラブは潰れたし、他の場所で打ってるのか？」

「まあ……　でも、危険な場所だから毎日は行きたくない」

京太郎は白米をガツガツと口の中に運び、代金を置いて出て行こうとする。だが、ドサ健になだめられて、もう少しカニ屋に留まることになる。

「酒でも飲むか？」

「いいよ、趣味じゃないから」

「なら、ジュースはどうだ？　ラムネくらい置いてるだろ」

「それなら、後ろの二人に飲ませたらどうだい？　俺よりずっと子供でしょう」

「違いない！」

ドサ健は後ろの二人にラムネを注文し、京太郎には水を頼んだ。

京太郎はドサ健の服装を見て、麻雀で何かしているのだろうと思った。この時代に賭け事で人財産を築いた人間は多い。京太郎も数年間は豪遊できる程の資金を麻雀で蓄えている。だからこそ、自分と同じように麻雀で成功している者が理解でいるのだ。

「日本は復興しているぜ」

ドサ健は出された酒を飲んで、一息入れる。そして、熱く語り始める。

「平和日本の構築だってよ。だが、ごまかされてはいけねぇ。平和なんてこの世界にあるものか。平和なんていう甘い言葉に乗せられて、世間と仲良く手を取り合ったつもりでいると、俺達みたいな狼に喰らい尽くされる。世の中は弱肉強食、食うか食われるかなんだからな。

そうだろ？　京太郎」
　冷たい水を口の中に含んだ。
「俺達たちが、豚みたいにじゃなく生きていくには、自分流の生き方、頑固な地面を作るしか無いんだ。おまえだって、そう思うだろ？」
　京太郎の頭の中に走馬灯のように部活で打った麻雀の景色が流れた。そのすべてが運、不運では解決できないような、不可解な負けの連続。そして、敗北の連続。人はこの敗北を努力の差と呼ぶ。だが、努力を怠っていなかった京太郎にとってみたら、それは努力とは表現できない、実力とも表現できない、まるで、能力のようなものに感じられた。
「俺ぁ、今度社長になったぜ」
　ドサ健が誇らしくそう告げた。
「なんの会社なんだい？」
「博打会社さ」
　京太郎は水をもう一口飲んだ。
「なるほどね」
「わかるのか？」
「わからないけど、なんとなく理解できた」
　ドサ健は高らかに説明した。
　賭博といえば麻雀だ。これに限る。それに、麻雀は運じゃない。腕も必要になる。それに、複雑だから面白い。すぐに日本中のバカ達がやりはじめるに決まってる。サイコロやバッタ、花札の時代は終わったんだ。
「今じゃあ、この辺りにも十件近い雀荘が出来てやがる。その雀荘から俺のところに客を増やしてくれって、頼みにくるんだ」
「十件全部かい？」
「まだ、そこまでじゃないが、直ぐにそうなる。それくらい、俺に頼めば顕著に人が増えるんだ。俺の言葉だけでな」
　京太郎はドサ健の言葉が真実なんだと理解した。そして、ドサ健の行動力に驚いていた。
「そのうち、すべての店が俺にやっかいになるだろうよ」

「つまりは、愚連隊ってやつだね」
「まあ、そうだ――」
ドサ健は苦笑いを見せながらも、続けてこう告げた。
「だが、もっと高級なこともやってる。汚れ仕事ばかりをするわけじゃないんだ。なあ、京太郎。おまえも来ないか？」
「来ないか？　社員としてかい」
「ああ、社員としてだ」
後ろの少年二人を見つめて、あいつらも社員なのかと京太郎は質問した。
「そうさ」
「難しい仕事が出来るようには見えないんだけど」
「あいつらにやらせてるのは店の下調べだけだ。たいして難しくない。その下調べを俺が帳簿につけて、良い客が居たら他の社員を出向かせて、他の場所に鞍替えさせる。簡単だろ？」
京太郎はそれもそうだ、と、頷いた。
ドサ健は酒をもう一杯注文した。
「今、あいつらは寅に世話をさせてんだ。どうだ、適任だろ？」
最近、寅さんと会っていないが、こんな仕事をしていたのか。
「子供が好きそうには見えないけど、寅さんも妙なところで活躍してんだね」
「違いない」
ドサ健は新しい酒に口をつけて、ゆっくりと京太郎に告げた。
「なあ、デカイ仕事があるんだ。組まないか？」
「組む？　健さんとかい……」
「ああ、ドサ健と、坊や京だ。このコンビはいい。いいコンビになると思うんだ」
京太郎は少し悩んだ。この仕事を受ければ、健さんの部下となって安定した金が入ってくる。だが、群れたところで手に入れられるのは緊張感に欠ける虚しい勝利だけだ。京太郎は頷くことは出来なかった。それをよく理解していたからだ。
「ごめん、健さん」

京太郎は悲しそうにそう告げた。
「せっかくだけど、俺は、誰とも手を握りたくないんだ。手を握ったって、俺に平和は来ないし、心が踊るような対局なんて出来やしない。――安定なんて、博打打ちに対する冒涜だろ？」
京太郎はゆっくりと立ち上がり、カニ屋を出た。

夜明けの譜　1―2

暮から正月は、よく稼げた。

ほとんど連日、清水さんから教えてもらった唯一のクラブで牌を握った。

京太郎は清水のことを心配して、彼のことを心配して色々と情報を集めたのだが、それでも、彼に関する情報はすべて消えていた。まるで、彼が物語の中で必然的に消えてしまわなければならないように。

別に、清水のことを好いていたわけではない。だが、彼を極端に嫌っていたわけでもない。彼から教わることも多かったし、自分の知らない技も多く持っていた。だから、京太郎は彼のことをある意味師匠のように感じていたのだ。

京太郎は時に技を警戒しつつも、殆どが普通に打つことが多かった。理由は単純で、あのクラブに来る連中の殆どが余った金を心揺さぶられるギャンブルに費やしたいと思うような、薄汚い金持ちだけだったからだ。この時代、金を持っている人間は多く居た。東京は焼け野原になり、新たに何かを作り出すことが容易になっている。建造業界などは、それが顕著である。

京太郎は時に負けることも覚えた。いや、元々から負けることは覚えている。ママの教えを忠実に守り、客の足を渋らせるよには絶対にしなかった。七対三、これが現状の京太郎の勝率。現状の黄金比率であった。

京太郎は溜め息を吐き出し、肥えた財布を確認する。十代後半の青年が持つには大きい額だ。それに付け加えて、銀行にも大量の金を預けている。だが、金なんてどうでもいいのだ。一日を乗りきれるだけの金があれば、それで満足。それなのに、自分は金のために麻雀を打っているということを薄々だが、感じている。

自分は金のために麻雀を打ちたいのではない。自分の幼馴染、同級生、先輩、そのすべてを実力で捩じ伏せたいのだ。もし、それが出来るのであれば、こんな金なんて溝に捨ててしまえる。だが、それは出来ない。彼女達には、能力が備わっている。まるで、牌、役に愛され

ているような能力が。だからこそ、京太郎の心は、自分が手に入れた金を見るたびに落ちていく。
「今の俺ならー――勝てるか？」
京太郎は新しく出来たレートの安い雀荘に足を踏み入れた。
偶には、金のことなんて考えずに麻雀を打ちたいと思ったのだ。
中に入るとこの雪が降り、寒い中でも卓は満員になっていた。そして、賭け事が好きで、金を持っている人間というよりかは、仕事帰りのサラリーマンのような人間が騒ぎながら牌を握っているように見えた。
京太郎の先輩、染谷まこの実家の雀荘に少しだけ雰囲気が似ているように思えた。
「すまないね、満席なんだ」
「いいよ、麻雀は大人気だからね」
京太郎は店の中を見渡しながら、サラリーマン達の楽しげな表情を眺めた。
ーー一瞬で理解できた。こんな和気藹々とした場所に、玄人が紛れ込んでいる。それも、生半可な玄人ではない……。
視線の先には、サラリーマン達とは対照的に無表情で牌を握っている老人が一人いる。
「山を積むのが早い」
玄人は麻雀で飯を食べている。だからこそ、誰よりも早く地山を積みあげなくてはならない。仕込みを入れないといけない。それは普通に打っている時にでも癖のように出てしまう。
今日は強敵と呼べるような存在と打ちたい気分ではなかった。サラリーマン達と混じり、呑気に闘牌を繰り広げたい気分であった。だが、運命のように玄人の老人の卓が空いた。必然的に京太郎はその卓に座り、老人の顔を見つめた。
「坊や、何か俺の顔に付いてるか？」
「い、いいえ……」
京太郎は最初は普通に打つことを考え、仕込みを入れることなく山を積み上げた。

サイコロを回すと老人の山からの取り出しだった。
牌を四枚ずつ取り、自分の配牌を睨んでみるとーー信じられないものが入っていた。
〔東東東南南西西北北發１８八〕
京太郎は老人を見た。飄々とした表情をしている。
これは小四喜、大四喜爆弾だ。だが、なぜ、自分にこんな手を？
サイ振りに失敗した？　それとも、わざと……。
一巡目に〔西〕が出た。京太郎は迷わないでポンをした。
そして、また〔南〕が出た。これも迷わないでポンをした。
そして、これまた〔北〕も場に出たのだ。
京太郎は冷や汗を流し、老人の顔を眺めた。だが、やはり飄々としている。
「へへえ、大物が出来たね」
「ええ、怖いですよ」
いや、本当に怖いのはこの老人なのだ。
〔東東東發〕〔横西西西〕〔横南南南〕〔横北北北〕
京太郎は少し失敗したと思った。大四喜、字一色を狙って〔發〕を残したが、この〔發〕は老人の山から出てきた牌なのだ。だから、老人がこの〔發〕を握っていることはわかっている。なら、このダブル役満は成立する可能性がゼロに近い。
京太郎は必死に積み上げた自山の牌を思い出した。そしてーーツモ牌をずらしてすり替え、卓に叩きつけた。すり替えた牌は〔發〕。和了牌である。
「ツモ、大四喜、字一色」
老人はニヤリと笑い、懐から金を取り出して卓の上に投げた。
◆◇◆◇◆
京太郎の親になった。
正直、老人の意図がわからなかった京太郎はあの役満の仕返しをすることにした。
自山からの取り出しにするようにサイを振り、老人に大三元を積み込んだ。

老人はニヤリと笑い、ツモ牌を河の必要な牌とすり替えて大三元を和了した。
京太郎は老人の真似をして何も言わないで金を卓に投げた。
「坊や、おまえさん、どこでそれだけの技を覚えた？」
老人が京太郎と同時に雀荘を出て、外に出た瞬間にそう尋ねた。
京太郎はすこしムッとした表情で、爆弾を使えないと大勝負は出来ない。元禄を使えないと客を楽しませることが出来ない。技を使えないと麻雀を打つことが出来ない。と、老人に刺がある口調で告げた。すると、老人は高い声で笑い、裏で磨いたんだな、と、京太郎を褒めた。
「俺の家で飲まないか？」
「どうしてだい」
「おまえさんにもっと面白い技を教えてやりたくてな……？」
技、その言葉が京太郎の心を掴んだ。
この頃、京太郎は金なんかよりも、心躍る勝利や技に心を奪われいていた。だからこそ、この老人の『技』という言葉につられてしまった。
「――俺はこの辺りでは出目徳といわれておる」
「――京太郎、須賀京太郎です」

二の二の一座　1―1

出目徳に連れて行かれた先には、焼け野原にポツリと残ったボロ屋だった。ボロ屋だとは言っても、即席で作られた手製の家というわけではなく、普通の大工が作った一軒家、京太郎は出目徳の顔を見て、この人は手癖の悪さだけではなく、時運も持ち合わせているのかとほくそ笑んだ。

出目徳が戸を開けると目つきのキツイ女将がお帰りなさいと出目徳に告げた。出目徳は今日の稼ぎだと言わんばかりに肥えた財布を2つ取り出し、片方を女将に手渡した。財布を受け取った女将は京太郎の顔を一度見て、米兵との混ざりなのかいと尋ねる。京太郎は純血の日本人だが、面倒くさくなり祖父がイギリスの人間と嘘をついて適当に流した。

「爺、勝ったか？」

出目徳に連れられてちゃぶ台のある部屋に入ると上州虎が何食わぬ顔でお茶を飲んでいる。京太郎は虎さんどうしてここにいるんだいと質問する。虎の方も京太郎の訪問に大口を開けて驚いていたが、自分が出目徳の知り合いで安い金で居候させてもらっていると説明する。

「虎、少し外してくれないか、この坊やをお引きにするからよぉ」

「京をお引きにするのか？　こいつは飼い殺せる玉じゃねぇぞ、やめときな」

「この坊やが俺以上の博徒だって言うのか？」

「博徒としては爺の方が上かもしれないが、勝負師としては京の方が上だ。まあ、手を噛まれないように気をつけるんだな」

出目徳は虎の捨て台詞にしこりを残しながらも、雀卓に誘導し、面白い技を教えてやると京太郎の瞳を覗き見る。京太郎は爺さんのシワの寄った顔に薄気味悪い何かを感じながらも新しい技への好奇心に勝てないでいた。

信じられない速さで4つの山を積み上げ、京太郎の下家に座る。そして、出目徳はサイを振り、二の目を出した。京太郎はサイをつまみ、

同じように二の目を出してみせた。出目徳は期待感にニンマリと笑みをこぼす。
「坊や、その若さでどれだけ打ってきたんだ」
「打った回数なんて数えるわけないよ。勝った回数も数えてないんだから」
出目徳は自分が取る山を取り、京太郎も続いて山を切り開く。そして、出目徳はポンと字牌を倒して天和と宣言する。京太郎は出目徳の手をよく確認する。バラバラの手にはなっているが、確かに和了しているのだ。
「この技を名付けるなら二の二の天和、どうだ、俺と組まねぇか？」
2
京太郎は汚れが目立つ天井を見つめながら、隣で布団を着てる上州虎に声を掛ける。
「虎さん、出目徳っていう爺さんはどんな博打打ちなんだい」
「京、博打をする人間は色々といる。おまえさんは流れを感じることが好きで博打をしてる。だが、出目徳の爺は金を握ってねぇと落ち着かねぇ馬鹿なのさ。小さい頃から金に執着して、金を短時間で巻き上げる方法を足りねぇ頭で考えた結果がアレだ」
京太郎は少し考えて、本当の意味の博打打ちという存在がアレなのかと不思議と納得できた。
出目徳はお引きになるならこの家を宿にしていいと京太郎を居候にさせた。布団は金を持ってるなら自分で買ってこいと言い、明日から遠い雀荘を荒らしに行くとも言っていた。
場を荒らす、その言葉に少しだけ嫌な気持ちを感じる。彼が打ってきた麻雀は場を荒らす力を場を荒らす力でねじ伏せ、どの荒らしが一番凄いかを決めるようなものだった。だからこそ、自分が場を荒らすという感覚を事前に感じることが出来ない。確かに、技を使って場を荒らした経験はあるが、それは自らが牌に告げる暴力であって、彼女達が行ってきたのは――牌からの一方的な暴力なのだ。
「虎さん、まだ起きてる？」
「ああ、珍しく寝付けない」

「健さんに会ったよ、怪しい仕事やってるらしいね」
「ああ、俺も怪しい仕事に関わってるからな」
「……博打打ちが仕事したら終わりだよ」
「博打するための金稼ぎしてるだけさ」

　虎の瞳から炎が消えたと京太郎は悟った。彼は何人も煩悩にまみれ、そして、金を必死に追い求める博打打ち、勝負師、博徒、それらをここ一年で多く見てきた。そして、そのすべてが闘志のような何かを感じさせていた。虎に会った時、まだ、虎には炎が残っていた。だが、今は安定という足場に甘えている。

　――博打打ちとして終わる。

　案外、安定という確かな地面を見つけてしまったら、博打を家業にすることが出来なくなるのかもしれない。京太郎は自分が何時何時に虎のように地面を見つけるのだろうかと目を閉じた。

2

　〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕
〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕
　〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕
〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕

　ここに三十四枚の牌が並べられている。この山に技を施す場合、どのような工夫をすることが出来るだろうか？

【元禄積み】
　〔九〕〔裏〕〔八〕〔裏〕〔七〕〔裏〕〔六〕〔裏〕〔五〕〔裏〕〔四〕〔裏〕〔三〕
〔裏〕〔二〕〔裏〕〔一〕
　〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕
〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕

　これが一般的に言われる元禄積みである。自分が親番の時に七の目を出し、対面から牌を切り開いて、自分の山を掴む時に一気通貫を仕込むという酷くオーソドックスな積み込み。だが、これを成功させられないようなら、玄人として生きることは不可能。

【三元牌爆弾】
　〔裏〕〔裏〕〔中〕〔中〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔白〕〔白〕

｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝
　｛裏｝｛裏｝｛發｝｛發｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛中｝｛白｝
｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝

　大三元爆弾、五の目を出し、自分の山に仕込んだ三元牌を引き入れる積み込み。これの爆発力は凄まじく、どんな状態からでも大三元を狙えるとあって、玄人が好んで使っていたイカサマだ。だが、これは爆発力ゆえ、一つの雀荘で一度くらいしか使用することが出来ず、積み込みの粗さ＝摘発に繋がる。

【左手芸・カッパ抜き】

　｛白｝｛中｝｛發｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝
｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝
　｛白｝｛中｝｛發｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝
｛裏｝｛裏｝｛裏｝｛裏｝

　左手芸、カッパ抜きとも言われる初歩的なイカサマ。上家が牌を取る瞬間に山を整える形で仕込んだ牌を手牌の二枚、四枚、六枚とすり替え、自分に有利な展開を引き寄せる技。

　これら三つが基本的な積み込みの完成形、これら以外の積み込みは殆どがこの三種類の派生となる。

　出目徳が使った二の二の天和は爆弾の派生になる。だが、爆弾と一線を画す部分が一つだけある。自分の山だけではなく、もう一人の山を使うというコンビ打ちだから出来る暴力。

　この時代、イカサマを防ぐために二度振りのルールを採用する店が多かった。

　　　３・７・１１
４・８・１２　↓←　２・６・１０
　　→↑
　　５・９

二度振りでこの形、気づく人間はどれだけいるのだろうか、いや、発案者の並外れたセンスによって作り上げられた玄人だからこそ気付いた。麻雀打ちが一生に数回見れるかどうかわからない天和という夢の役満。それを即席で完成させる技、それが二の二の天和。

【二の二の天和】
（下家）
〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔七〕〔五〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕
〔三〕〔一〕〔裏〕〔裏〕
〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔八〕〔六〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕
〔四〕〔二〕〔裏〕〔裏〕
（自山）
〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔白〕〔裏〕〔白〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕
〔裏〕〔九〕〔九〕〔裏〕
〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕
〔裏〕〔九〕〔九〕〔裏〕

これが二の二の天和、二つの山とサイを使って組み上げる手積み麻雀最強のイカサマとなる。コンビで打つことを想定して作られたこの技、コンビで打っているということを悟られない限り永遠に使える最強の技。京太郎にとって、この程度の積み込みは赤子の手をひねるより簡単だ。

3

出目徳は眠っている京太郎を蹴り起こす。京太郎はギロリと出目徳を睨んで、だが、欲にまみれたその表情を見た瞬間に打ちに行くのだと悟った。京太郎は語りかける、どのクラブを荒らすのかと、出目徳は互いの技量を確かめ合う、昨日の安い場所で使うと言った。

「……いってらっしゃい」

出目徳は何も返さずそのまま部屋を出た。京太郎はあくびを一つつき、最近できた喫茶店に足を運んだ。

時間が過ぎるのは早いもので、喫茶店で泥水と同じ味のコーヒーを飲んでいたら丁度いい時間になった。京太郎は風呂に入りたいとボヤキながら雀荘に入る。すると出目徳が飄々と牌を握っていた。京太郎は空いた卓の椅子を取り、その卓を観戦する。

打っているのは、この雀荘のマスター、ロイド眼鏡の男、パイプを咥えた男。マスターに至っては、他の仕事から帰ってきたのだろうか、額から汗を流しているが、ネクタイも外さず卓に向かっている。

「誰が勝ってるんだい」
京太郎はわかりきったことを出目徳以外の三人に聞いた。
「馬鹿つきさ。このおっさんの」
ロイド眼鏡が顔色を悪くして出目徳を睨んだ。
店主はこれじゃあ商売が成り立たない。卓代を倍にするかとぼやく。が、その言葉を言い終わると同時に出目徳の大きな手に差し込んでしまう。出目徳が京太郎を見て、次は坊やが相手かいと白々しく尋ねた。
「待ってくれ、このままじゃ俺の意地が許さない。坊や、もう少し打たせてくれ」
マスターが奥さんを呼んで財布を持ってきてくれと頼む。京太郎は出目徳を睨んで、マスターの肩を持つ。
「マスター、どのくらい負けたんだ？　俺がこの爺さんに差し馬握らせるから、金額を言いな」
マスターは京太郎が負けた時はどうするんだと尋ねる。俺が負けたらマスターの負け分を俺が払うよ、なんて無表情で告げて、立たせる。マスターは金額を言って、京太郎は出目徳に差し馬を申し出る。出目徳は顔をしかめ、わかったよ、なんて駄々っ子が渋々納得するように言った。
一曲勝負、京太郎の親だ。出目徳は下家に座っている。
「強欲爺、店主からどれだけ巻き上げてるんだよ、打てなくなるぞ」
「毟り取れる奴から取るのが麻雀だろうが」
一局勝負、出目徳が京太郎のことを睨んだ。だが、京太郎はこの睨み、二の二の天和を仕込むと読んだ。洗牌の中で必要な牌を拾い、山を積み上げる。
「二だな」
京太郎は当たり前のように二の目を出す。出目徳も当たり前のように二の目を出した。
カチッカチッと音を立てて山を切り崩す。そして、京太郎の手は天和に仕上がっていた。
「気持ち悪いぜ、人助けしたら、お天道様が味方してくれるのか、天和」

出目徳は露骨に嫌そうな顔で金を投げた。最初の一番、通しも入れないで二の二の天和を仕込んだ手前、一本目で成功させるとは考えていなかった。京太郎は金を拾ってマスターに渡す。マスターは感謝の言葉を絶やさない。

「爺さん、搾り取ってやるよ、お天道様は俺のことを見てるようだ」

京太郎はピースサインを額に二回押し当て地面に指を指した。出目徳はニンマリと笑って、どっちが絞られるんだろうね、と、高笑いをした。

京太郎がやろうとしていること、それは二の二の天和の地和版。自分の積み込みの腕を見せてやるから地和を和了しろという宣言だ。

4

京太郎は煙草の紫煙を楽しみながら歩く。出目徳の爺さんは巻き上げた金をニマニマとした表情で眺めている。その姿を見て、嫌悪の表情になるが、玄人はこういうものだと理解してそっぽを向く。

「坊や、どうして差し馬を握らせた」

「暇潰しで打つ場所を減らしたくなかっただけさ。普通の麻雀を打てる場所ってのは、打ち手にとっては大切なんだよ」

「ケッ、巻き上げられる雀荘は腐る程にあるのに一つの店に執着するな、金運が逃げるぞ」

結局は金か、そう呟いた。

二の二の一座　1―2

それからのこと、新宿を荒らすことを嫌がった京太郎に悪態をつきながら八王子、浦和、川口などの雀荘を巡っていた。京太郎のここ数年で積み上げてきた積み込みの技術は出目徳と同等。出目徳が一二時間先に賭場に入り、その後に京太郎がコンビだとバレないように入店する。

大抵、出目徳は技を使うことなく場を荒らして、京太郎が入店し、天和で場を和ませ、二度目の天和で凍りつかせる。それを何度も繰り返していると大枚と呼べる金額が懐に入る。出目徳は口元を緩ませることしか出来ない。

渡り鳥、玄人の世界では場を荒らしてサッと消え去る。一度しか入らない賭場、顔を覚えられたとしても地区が違う場所なら睨まれることもない。この時代、莫大な数のヤクザが居て、少し離れた場所は違うヤクザのテリトリーになっている。だから渡り鳥になれる。

金はあり余っていた。だが、出目徳は持ち合わせの強欲さを見せ、奪えるだけ奪って、京太郎に最低限のしのぎを与える。嫌気が差していたのは確かだが、特別感情移入出来るような相手とは打っていないのでコンビを解消する理由が作れないでいる。

東京の空襲の火が少なかった場所は痛手が少なかったためか、早い段階で雀荘が出来上がり、下手の横好きと呼ばれる存在が大量に居座っていた。

甘い客は腐る程。

出目徳は金という雑草を毟る悪徳を各地方で繰り返していた。

日に日に上がっていくレート、毟る金も枚数を増し、実りも多くなる。

「天は俺を見放してなかったか！　天和」出目徳がわざとらしく叫んだ。

「なんだって!?」出目徳の手を睨みつける客達。

「これだから博打はやめられねぇな！」

「冗談じゃないぜ、チョンボじゃねぇのか」

「はっはっは、悪いな。最初にアガってるんじゃ、こりゃ楽だ。俺アこんな手でもないと勝てねぇからな、勘弁してくれ」
京太郎は天和を和了する出目徳を冷めた表情で眺めていた。
このセリフは出目徳がどの雀荘でも口にする。決まり文句というやつだ。京太郎は溜息を吐き出して次の山を仕込む。次は天和なんてものじゃない、ただの大三元爆弾のアシストだ。京太郎は出目徳が三元牌を仕込むのを見て、一枚足りない三元牌を暗刻になるよう切り出しで出目徳が引く場所に仕込む。
打っているカモは完全に場の流れが出目徳に向かっていると驚いている。ただ、京太郎だけは冷静に出目徳の滲み出る欲に溜息が出そうな顔をしている。仕組まれた流れをあたかも自分の流れだと言い張るこの腐った根性、そして、良心の欠片もない容赦なさ。ある意味では、玄人の完成形なのかもしれないと納得させられるものがある。
京太郎の親番になる。京太郎はとある技を使う準備に入る。これが実戦で通用するのかという試しという部分がある。その技、京太郎が未来から来た人間だからこそ知り得るサマ師が憧れる難しいイカサマ。二の二の天和がコンビで安全に天から和を授かるなら、この技は――地面をひっくり返して、そして、天を跪かせる。
――カタンッ
牌が鳴らす甲高い音が小さい範囲から響いた。
「……おお、俺も授かったようだ」
タンッそう牌を倒し、天和を授かったと宣言した。

【自山】
〔裏〕
〔6〕〔9〕〔7〕〔④〕〔一〕〔7〕〔三〕〔8〕〔二〕〔②〕〔西〕〔5〕〔③〕
〔西〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕

【手牌】
〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕〔裏〕

〔裏〕

これはイカサマというよりも手品と言ったほうが正しいだろう。麻雀打ちなら一度は耳にする手積みだから出来る積み込みと技術の最高峰、――燕返し。

自分の山の下段、十四枚に施す幻想、失敗したら最後、摘発は免れない。実戦で磨かれた者だけが使用したと呼ばれる技。燕返しの原理は酷く簡単だ。自山の下段十四枚を和了出来るように仕込み、そして手牌と入れ替える。麻雀は三人の視線にぶつかるゲームだ。それを掻い潜り、牌を返すには、並外れた神経と指の繊細さ、何よりも自分の手を信じられる度胸が必要になる。

この燕返し、下家に座る出目徳以外は何一つ思わなんだ。今日は珍しい役満が飛び交っているという大雑把な認識と馬鹿みたいな大技を暇潰しに使っている狂気、それらが混ざり合い、混沌としている。京太郎は投げ渡される銭をそっと拾い上げた。

2

酷く退屈だった。それが理由だ。京太郎は場違いな料亭で胡座をかいてあくびを一つ。出目徳が珍しく銭を出すと言って入った料亭。部屋は二人で入るには少しばかり広く、ボロ屋で寝泊まりをしている京太郎にとっては、新鮮味がある場所だった。

出目徳は京太郎を褒めるか、それとも叱るかを深く考え込んでいた。燕返しという大技、それを暇潰し感覚で成功させた京太郎、褒める理由になる。もちろん、出目徳は燕返しという技を知っている。長い間玄人をやっているのだから、燕返しの作り方、やり方、和了の仕方、なんでも知っている。だが、それ以上に燕返しという技は危険を伴うのだ。出目徳は二つの選択肢の判断に悩んだ。

「相手が玄人じゃないから使ったんだ」

最初に声を出したのは京太郎だった。京太郎は窓の外から見える小汚い町並みを見ている。出目徳は燕は人の家に巣をつくる、この意味がわかるか？　そう尋ねる。京太郎の飄々とした表情に不気味さを感じたのだろう、出目徳は叱る方の選択肢を取った。

「餌を取りに行っただけさ」
「燕返しはどんなに技術がある玄人でも躓く時は躓く。その点、二の二の天和は爆弾仕込む要領で積み込むだけで終わる。玄人は安全な技を使うもんだ、あんまり下手な技を使うなよ」
　出目徳の意見は正しい。確かに燕返しは圧倒的な威力を誇るサマであるが、どうしても危険が伴う。燕返しを行うには最低でも一秒ちょっとの時間が必要になる。その一秒ちょっとが自分以外の三人が打っている麻雀にとっては長い。それを掻い潜れるだけの勝負感が無ければ使うことなんて出来ないだろう。
　京太郎は出目徳の言葉をちゃんと理解していた。燕返しという技は玄人とぶつかる場合、絶対に出来ない。玄人は一目で自分の手牌を暗記し、それ以降は他の打ち手の監視に回る。理牌しなくても麻雀を打つ奴なんていくらでもいる。そんな奴らと打つ時に呑気に燕は飛べない。
「……なあ、坊や。おまえさんはどういう考えをして、俺と飛んでるんだ」
　出目徳の目が鋭くなり、表情も険しくなる。
「爺さんの笑い方が酷く気持ち悪くてね、癖になってるんだ」
「坊や、おまえさんは俺のオヒキだ。オヒキは与えられた仕事だけをやっていたらいい。そうしたら大枚が舞い込んでくるんだ。仕事師は俺だ。おまえは、勝負の最中に、俺がどういうことを考えているか、どう動こうとしているのか、それをすばやく読んでいくんだ。本当に呼吸があっていれば通しなんて必要ねぇ。俺の目の色、顔の色一つでスッと動いちまう。良いオヒキってのはそういうものなんだぞ」
　京太郎の腹の中は煮えくり返っていた。彼が麻雀を打つ理由は強くなるため、だが、出目徳はその逆で金を得るためになっている。互いの価値観は酷く違っている。京太郎は勝つことに執着しているが、負けることに恐怖しているわけじゃない。負けがあってこその麻雀だと思っている。だが、出目徳は買って金を毟る。絶対に負けない方法を作り出して、そして、また毟る。
　京太郎はコンビを解消しようと喉まで来ていたが、寸前で思い留め

た。コンビをやめる理由はとうの昔に出来上がっている。だが、そこまで深い理由ではないのだ。出目徳はお山の大将をやって、自分に甘い汁が降り注げばいい、そんな価値観で生きている。この強欲爺が死に絶えるのは近い、ほくそ笑みながら死ぬ姿を見るのも悪くない。それがやめない理由になりえた。

「わかったよ、もう遊ばない。爺さんは遊びは嫌いなようだ」

「それでいい、絶対に勝てる博打の旨さがすぐにわかるさ」

下衆な笑みを浮かべる。見慣れているが、気持ち悪いと思った。

3

早稲田大学の周辺を流していた。京太郎と出目徳のコンビの息の合い方が終着点に近づいてきたことを意味する。この時代の学生はビリヤードや麻雀を好んでいた。学生というものは目がいい。そして頭もいい。デジタル打ちの芽が出始めた時期だ。裏筋理論やらが登場し、論理的に麻雀を打つ人間が少なからず現れた。そして、その理論を使うのが学生という構図である。

学生が入り浸っている雀荘だ、稼ぎはたいして出ない。だが、互いの調整として見たら最高の場である。学生はいつでも気構えている。発言する度胸もある。技を見破られるリスクが高まる。だが、それがいいのだ。気が抜け始めた京太郎に喝を入れるにはもってこいの場所。出目徳は京太郎の危機感を強めようとしている。

卓に着いているのは京太郎と出目徳、そしてキツネ顔の学生二人だった。たぬき顔はしつこくない。キツネ顔は妙にしつこい。出目徳はキツネ顔を選んで打っていた。大抵、キツイ顔をしている学生は最新の理論を用いて麻雀を打っていることが多い。この二人も地力は確かにあった。だが、今回は流れがなかった。

憔悴しきった表情の二人の学生、ヒラで打ってた出目徳に国士無双ツモが入ってから荒れ始めた。金に余裕が無い学生、どうにか負けを取り戻そうと高い手を狙っていくが、出目徳があざ笑うかのようにゴミ手でそれをブロックする。それを続けていたら誰だってこういう顔になるだろう。

二回目、三回目、どれも出目徳の圧勝で終わっている。そして四回

目。
出目徳が京太郎をチラリと見た。京太郎はこの辺りだと見切りをつけて、自分の〈五〉をポンと取ってエレベーターした。
【エレベーター】
コンビ打ちの初歩中の初歩、仕事師が欲しい牌を不要な牌と交換するというポピュラーな技。だが、どの牌が欲しいのか、熟練した通しの実力が無ければ使えない。
出目徳は次巡に四暗刻を自摸和了した。
さて、ここからは出目徳が舞うに舞う、京太郎とのエレベーターを駆使して高い手をどんどん作り上げていく。京太郎はその姿を眺めて、必要に応じて牌を送り込む機械となっていた。嫌気が差す気持ちはあるが、老い先短い老人の介護だと思って流していた。
夕方近く、学生二人がハコテンだと言って溜息をついた。京太郎と出目徳は静かに卓から離れ、帰路につく為に駅へと歩を進めた。
電車を待っていると学生二人がこちらに向かってきた。
「おいおい、あいつら向かってくるぜ」
出目徳は嫌そうな顔をする。
帽子をかぶっていた学生が帽子を取り、ペコリと頭を一度下げる。
「すいません、さっきのお金、一旦返してもらえませんか」
「ふざけちゃいけねぇ、勝負の金だぜ」
「そうですが、だからお願いしてるんです。春休みで、故郷へ買える汽車賃だったんです。どうにも、よわったなぁ」
出目徳はツンと横を向いた。
「こんなにも負けるとは思わなかったですから、無茶な言い方ですが、今日だけは勘弁してください」
すいません、お願いしますと二人は頭を下げた。
「ご両親は元気なのか？」
京太郎は財布を握り締めた。二人は田舎なので大きな怪我も無く元気ですと答えた。京太郎は二人の肩を叩いて、親孝行をするために学業に励んでいるのに安いギャンブルに手を付けちゃいけない。麻雀は頭の善し悪しで決まるゲームじゃない。足を洗えと言うわけ

じゃないが、のめり込むな。そう言った。
「あんた達の方が少し年上かもしれないが、麻雀に関しては俺の方が年上だ。これを持ってご両親に美味しいものを食べさせてあげな」
京太郎は財布の半分の金を二人に分けさせた。

4

「気に入らねぇね」出目徳は棘のある言い方でそう告げた。
「そうかい、それは悪かったね」京太郎は無表情で返した。
「坊や、玄人は金を得るために他人を蹴落としているんだ。それを否定したら勝負なんて出来ない。情は捨てた方がいい」
京太郎は溜息をついた。出目徳の言っていることは正しい。確かに勝負の世界に情は必要ない。安い金額とは言ってもギャンブルをしている学生なんかに金を返す必要なんて無い。だが、京太郎はどうしても情という感情を捨てられないでいた。相手が破産するまで打つなら破産されるのが普通なのだろうが、助けてくれという言葉を聞いたら手を差し伸べてしまう。
「今、俺には両親が存在しない。あいつらは両親が居るんだ」
「……坊や、確かにおまえさんのやったことは良いことだ。だが、おまえさんがやってきたことは悪いことだ。悪いことをやってるんなら、最後まで悪い奴でいないといけないんだ。そうしないと、ムラが出来る」
「……肝に銘じておくよ」
ゴールデンバットを咥えて、マッチで火をつける。